

Rapport Management in Japanese and Thai Group Discussions

著者	青木 アタヤ
号	9
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	国博第122 号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59242

あおき 青木 アタヤ

学位の種類 博士（国際文化）
学位記番号 国博 第 122 号
学位授与年月日 平成23年 3 月25日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期 3 年の課程）
国際文化交流論専攻
学位論文題目 Rapport Management in Japanese and Thai Group Discussions
（グループ・ディスカッションにおけるラポールマネジメント
－日本人とタイ人の対照分析－）
論文審査委員 （主査）
准教授 中 本 武 志 教授 宮 本 正 夫
教授 小 野 尚 之
教授 上 原 聡

論文内容の要旨

1. 研究の目的

人間のコミュニケーションには文化的なイデオロギーが反映されており、言語が異なれば人間関係を円滑にするコミュニケーションの方法も異なる。これは、異文化間コミュニケーションにおいて、しばしば摩擦が生じる要因の一つである。本研究は、日本人とタイ人がそれぞれ数名のグループによるディスカッションの中で、課題の解決を図りつつ、いかに互いの関係（ラポール）を維持・管理するかという点についてどのような違いがあるかを明らかにすることを目的とする。さらに、背景にあるこの 2 つの文化には、それぞれどのようなイデオロギーが存在するかということも併せて検討する。

2. 背 景

日タイ間の交流は600年以上も以前に遡り、2007年には両国の修好120周年を迎えた。近年、日本に長期滞在するタイ人、またタイに長期滞在する邦人の数がそれぞれ数万人にも上る。さらに、互

いの国を訪れる観光客は、年間を通して百万人以上にもなっている。日タイ間の交流が増している中、異文化間の誤解がしばしば報告される。Wuwongse & Washiradilok (2001) は、日タイの異文化交流に長く携った経験のある日本人とタイ人の大規模意識調査を行った。調査の結果によると、日本人はタイ人が「陽気、一人でいるのが好きではない、几帳面ではない」などを特性と考え、タイ人に対して「規律の尊重、公私の区別、組織に対する自覚、見栄を張ることを控えること」などの行動を期待すると述べた。一方、タイ人は日本人が「まじめ、心を開かない、厳しすぎる、型にはまりすぎる」などを特性として挙げ、日本人に対して、もっと「ペンガンエン（気楽でゆったりしており、堅苦しくない様子）してほしい」、あまり物事に「固執しない」ことを期待すると同調査では述べられている。日本人とタイ人が互いに対してこのように感じているのは、相手の行動が自文化の規範や期待に沿わないことに原因があるのであろう。本研究は、この特性の受け取り方は、言語使用に現れるか、またその特徴は何かということを明らかにする。

3. 前 提

サピア＝ウォーフの仮説（言語相対論）によれば、言語は認知過程及び世界観を形成し、社会構造に影響を与える。言語と社会・文化の相互作用を認める立場からは、現実の社会構造や人間の思考が言語や行動に影響を及ぼし、年齢、性別、職業などアイデンティティに関わる社会的な要因が言葉の使い方を左右するということが論じられている。本研究は、言語・思考・文化が密接な関係にあり、互いに影響しあうという作業仮説に立ち、言語使用と認知の構築・再構築が相互に関連し、循環的に影響し合い、次第に共同体に定着すると考える。言語表現や非言語行動は、使用者の個人的及び文化的価値観、人生観、そして人間関係に重要な要素を反映する。従って、語彙の選択、会話構造、言語行動のパターンなどを検証することによって、話し手が所属する集団の文化、価値観、人間関係に関わる要素などを見つけることができるというのが、本研究の前提である。

コミュニケーションとは、情報の伝達及び交換のみならず、社会的・感情的な関係の維持管理という側面もある。たとえそのコミュニケーションが課題の解決を目的とするものであっても、やりとりの中には、タスクの内容だけではなく、人間関係を維持する要素も含まれている。人間の集団には、この二つの側面が互いに折り合いをつけながら、常に共存している。小集団内のコミュニケーションは、集団の構成員が自己観および集団観をどのようなものか暗示するのである（Lesch, 1994）。

本研究は、小集団の中で、日本人とタイ人はそれぞれこの二つの側面にどのように折り合いをつけるのか、ラポールマネジメント理論（Rapport Management Theory）（Spencer-Oatey, 2000）の観点からそれぞれの特徴を比較したい。また、それはどんな文化的なイデオロギーで説明できるかということも解明する。

4. 理論の枠組み

Spencer-Oatey はラポールマネジメントを「言語の使用を中心に対人関係の管理、調和の取れた社会関係を促進・維持、また脅かすことである」と定義した。この理論は次のように要約される。人間関係の調和／非調和には、フェイスと社会的権利といった二つの側面が関わっている。前者は名誉、評価、尊厳などに対する意識で、他者からこう見られたいという肯定的な自己イメージである。後者は公正さ、配慮、集団への受け入れ／排除などの期待で、満たされない場合には対人関係に悪影響を及ぼす。どちらにも個人的および社会的な側面がある。表1に、この考えをまとめたものを示す。

表1 ラポールマネジメントの構成要素 (Spencer-Oatey, 2000: 15)

	フェイスマネジメント (個人的／社会的価値)	社会的権利マネジメント (個人的／社会的権利)
個人的／独立的視点	資質のフェイス	公平の権利
社会的／相互作用の視点	立場のフェイス	交際の権利

フェイス侵害行為 (Face Threatening Act, FTA) の緩和ストラテジーを中心とする発語内行為を主に扱っている Brown & Levinson (1987) らのポライトネス理論と異なり、ラポールマネジメント理論は談話 (discourse)、参与 (participation)、文体 (style)、非言語 (non-verbal) といった領域にも言及する。例えば、どのような話題を選択するか (個人的な話題か一般的な話題か等)、選択された話題をどのように扱うか、話者交代 (その場にいる人に会話への参入を許すか、次の話し手を指定するかどうか等)、聞き手の反応 (あいづちなどがあるかないか等)、声の調子 (まじめに話すか冗談まじりか等)、ジェスチャー等があげられる。すべての言語は、様々な選択肢を提供するが、選択の範囲や相応しさは社会や文化によって異なる。

5. 本論文の構成

本論文は、次の6章から構成される。

- 第1章 序章
- 第2章 先行研究
- 第3章 研究方法とデータ
- 第4章 グループマネジメントの社会的な側面
- 第5章 雑談の中のラポールマネジメント
- 第6章 総括

以下、詳しく内容を見ていくことにしよう。

6. 本論文の内容

第1章は、本研究の背景、目的、具体的な研究課題、論文の構成、研究の意義について述べる。

第2章は、先行研究やアプローチについて、以下の4つのセクションに分けて説明する。

2.1節ではことばと認知について述べる。話し言葉を生み出す人間の認知的処理システムは、話している瞬間、認知容量に制限があり、それに生理的な制約の要因が加えられる。このため、人間の発話はかならずポーズによって区切られる。おおよそ2秒を一つの単位とし、各単位内に多くの場合、動詞を含んでいる。Chafe (1994) はこの意味的まとまりのある単位を、イントネーション・ユニットと呼んでいる。この発話産出の特徴は、世界のあらゆる言語に見られる。

発話に使ったことばを詳細に検討することによって、話し手がどのような態度で自分・他人・世界を関係づけ、そして、それらの関係をどう評価するかを理解することができる。Eggins & Slade (1997)、Martin & White (2005) や Malone (1997) は、語彙、表現選択、談話構造などの尺度を用いて、話し手の態度や見方を観察する枠組み・アプローチを提案した。このような態度の表現はラポールマネジメントにとって重要な意味を持つ。

2.2節は文化とコミュニケーションのスタイルについてのセクションである。文化的信念や規範は、人の会話スタイルにしばしば反映される。Tannen (1984) は会話のスタイルを組み立てる措置をいくつか紹介した。例えば、話題がどのぐらい個人的な範囲にあるのか、興味の示し方、反応の仕方、発話のスピード、間の取り方、会話への参加の仕方、笑いなどである。文化によって、人間関係を円滑にするための、好まれる会話のスタイルが異なる。この措置を尺度として、多種のスタイルを比較する先行研究が Tannen (1984)、Iwasaki & Horie (1998) や Pavlidou (2000) 等にも示されている。

2.3節は人間関係と語用論に関するセクションで、ポライトネス理論 (Brown & Levinson, 1987) と、それを大きく発展させたラポールマネジメント理論 (Spencer-Oatey, 2000) を対比することによって、両者の特徴を明らかにする。

2.4節はグループ間コミュニケーションの特徴や分析アプローチについて述べている。会話参加者が2人しかいない会話と違って、課題の達成を目的とする数人によるグループ・ディスカッションは、ほとんどの場合、議論を仕切るリーダーが生まれる。また、グループの構成員がそれぞれの役割を分担することになる。課題を達成することと同時に、人間関係を運営していくことが、どのグループにおいても普遍的に見られる。この現象は文化・言語を問わず、あらゆる社会的組織、集団、国など様々な規模で見られる。グループの議論がどのように進行するかという過程を分析するため、Bales (1976) はグループで起きたすべての言語と行動を単位に区切り、語用論的な機能に

分け、カテゴリーに分類したうえで、頻度を計算し、パターンや構造を見出す「対話過程分析 (Interaction Process Analysis, IPA)」という分析方法を作り出した。IPA 分析法は英語圏ではよく使われ、会話分析に非常に有効であるとされる。しかし、談話の流れを無視して、発話単位だけを検証することには、①発話の機能は必ずしも明快に区別できるものではない、②かかっている重みが均等ではない発話をまとめて計算することは非常に難しい、③多言語の会話を比較するのに会話の区切り方や語用論の解釈はどの基準で行えば妥当なのか不明である、④あらかじめ決まっている発話機能のカテゴリーに発話を当てはめることがしばしば不自然となる、等という問題がある。これらの問題に対処するために、本研究は IPA で用いられている単位ではなく、Chafe (1994) によって提案されたイントネーション単位を使い、日本語とタイ語のデータを区切ることにした。さらに IPA で定められた既成の発話機能の項目を使わず、実際に起きた発話を観察して、機能を分別した。また、態度を表す語彙、会話スタイル、会話の構造などを比べる尺度として、グループ・ディスカッションの会話分析にこの単位を適用した。

第3章は、研究方法とデータについて記述した。本研究では、日本人5人のグループとタイ人5人のグループを、それぞれ3つつくり、問題の解決を求めるゲーム問題に取り組んでもらった。それぞれのグループの参加者は男女混合で、年齢が近く、同じ大学のサークルに属する親しい仲間同士である。参加者は合計で30人、年齢は19歳～35歳である。ディスカッションは、大学の施設において行い、すべて録音機とビデオカメラで収録した。収録したデータは、文字化し、イントネーション単位に区切り、全体の意味を考慮しながらそれぞれの単位を一般的と思われるコミュニケーションの機能に分けた。また、それをカテゴリーごとに整理して合計し、グループ内のコミュニケーションの構造を見出した。すべての発話機能は次の9つのカテゴリーに分類できた。なお、取り出された日本語とタイ語の議論に見られる特徴は、次の第4章と第5章で分析する。

■ タスクの側面 (Task dimension)

グループ・マネジメントエリア (Group management area)

1. 議論を進める指示 (Giving orientation)

例「じゃ、私はこの会を進行します」 1単位

「決まった? / よし、じゃ / エリちゃんから」 3単位

2. 意見を求める質問 (Asking for opinions)

例「だれとだれで迷っているの?」 1単位

「じゃ、C、D、Eを / 残したわけ?」 2単位

3. 助けを求める発話 (Asking for help)

例「これはどうする?」 1単位

意見交換エリア (Opinion exchange area)

4. 意見主張 (Giving opinions and information)

例「じゃ、私から言うと／えっと、選択基準は／年齢と性別 3 単位

5. 異議を示す発話 (Showing signs of disagreement)

例「だめだよ」 1 単位

6. 意見の躊躇い (Delay for words)

例「一番なんという／それ何という」 2 単位

■ 社会的情緒的側面 (Social emotional dimension)

7. 雑談 (Social talk)

例「難しいよね」 1 単位

「すごく悩んでいるんだよ」 1 単位

8. 協力的反応 (Cooperative response)

例「そうそうそう」 1 単位

9. 肯定的感情表現 (Showing positive emotion)

例「ほ：：」 1 単位

「|笑い|」(再び息を吸うまで)

数値から分かったことは、第一に、タイ人のグループにおいては議論の進行を指示することを表すイントネーション単位が、日本人のグループより多く、3つのグループの平均ではタイ人のグループで11.5%であるのに対して、日本は5.7%と半分以下であるということである。その原因と指示の特徴は第4章で検討する。第二に、ほとんどの発話機能のカテゴリーにおいて、日本人のグループよりタイ人のグループにおいて、生じた言語行動がまとまらず揺れが多く見られた点である。日本人のグループは3つとも、すべて参加者の参与の割合が一定のパターンで確認できるのに対して、タイ人のグループでは、一定のパターンは見つからず、ある種の行動が特定の参加者に偏った集団もあった。参与の領域では、日本人のやりとりでは、参加者が互いの行動を察し、役割の規範に応じて自分の行動を調整するのではないかと推測される。一方、タイ人のやりとりは、それぞれの行動が独立し、個人的志向を重視するのではないかと考えられる。

第4章は、日本人のグループとタイ人のグループの行為指示表現 (directives) を考察する。指示表現とは、話し手が聞き手に何かをさせようとする表現である。ディスカッション活動の中では、課題解決に向けて議論を推進させる効力があるため、グループ運営にとって重要な行為である。本研究では、「方向付け (give orientation)」と「意見伺い (ask for opinions)」の項目に当る。指示

表現を最も多く発話した参加者は、一般的にリーダーと見なされる。この章は、指示表現をもっとも使った参加者の特徴、指示の方向、指示表現の前後の会話構造について検討した。明らかになった相違点は、日本人のグループが集団中心型のやりとりを好むのに対し、タイ人のグループは個人中心型のやりとりを選ぶ傾向があるという点である。この二つのグループの違いは次のようにまとめられる。

4.1 日本人の集団中心型やりとり (Communal-oriented interactional pattern)

4.1.1 タスクのリーダーと社会的情緒的リーダーが別人である。行為指示表現をもっとも多く発した人と、社会的情緒的表現をもっとも多く使った人は、それぞれタスクリーダーと社会的情緒的リーダーと呼ぶことにした。日本の3つのグループとも、この2つの役割を二人で分担していた。

4.1.2 集団中心型の指示表現を使う傾向がある。日本人のグループはグループ全体へ向けて発せられた指示表現が、個人へ向けた発話より多い。

4.1.3 やりとりは一般的な規範に従っていた。つまり、指示表現は、隣接応答ペア (adjacency pair) でもあるため、通常「質問－返答」「指示－返答」のようなペアとなる発話が連続して起こる。会話構造を観察したところ、日本人のグループ作業ではたとえ誰に向けて発せられた言葉なのか特定されなくても、指示表現に応じてだれかが返答するため、会話の構造が安定し、予測できる。

4.2 タイ人の個人中心型やりとり (Individual-oriented interactional pattern)

4.2.1 タスクのリーダーと社会的情緒的リーダーの役割は一人の人物が包括的に担っており、日本人グループのような役割分担は見られなかった。

4.2.2 個人中心型の指示表現を使う傾向があった。3つのグループともグループ全体へ向けた発話より、誰に向けた発話なのか明示した指示表現のほうが多かった。

4.2.3 会話の独立参加型が好まれる。行為指示表現の会話構造を観察したところ、3つのグループとも一定のパターンが見られなかった。隣接応答ペアも、誰に向けた発話なのかを示されなければ、第1発話が期待した第2発話は、すぐに返答されない。よって指示表現を繰り返したり、誰に答えてほしいのかを明確にしたりする傾向が見られた。

第4章では、日本人とタイ人の議論においては、課題解決と人間関係の営みが異なるイデオロギーに基づいて行われると結論づけた。すなわち、多人数のやりとりの場では、日本人はグループ全体の対象や事象を強く意識しつつ議論を進める傾向があるのに対し、タイ人にはおそらく、個々人の存在や資質を強く意識して話し合うことを好む傾向がある。

第5章は、社会的情緒的な側面から雑談 (Social talk) のカテゴリーを取り上げ、日本人グループとタイ人グループの違いを考察した。たとえば、雑談において、話し手がどこに焦点を置いたか、

どのような語彙や表現でどのような態度を表したか、自己と他人をどう扱ったかということを明らかにした。結果は次の通りである。

5.1 集団中心型日本のやりとり (Communal-oriented interactional pattern)

5.1.1 雑談のテーマは集団のメンバーに共通し、無難で同意しやすいものが好まれる。例えば、今現在、皆で取り組んでいる課題や共通の知人（自分達の大学の何々先生は「大変、面白い、かわいそう、すごい、難しい」）などである。このような発話は話し手と聞き手の共感を示しあうもので、何度も繰り返されることによって、和やかなイメージが生まれるという効果がある。

5.1.2 緩和表現・ばかり言葉が強調のことはより圧倒的に多く使用されていた。これらの表現は強い感情を呼び起こさないため、比較的通常の表現を使う傾向がある。3つのグループとも同じパターンが見られ、緩和効果のある「ね」「よ」などの終助詞を除いたとしても、強調表現と緩和表現の割合は合計31：92となっていた。

5.1.3 自分が場の話題になった時、控えめな表現で言及する傾向がある。話し手が自分のことをトピックとした回数と、相手のことをトピックとした回数を比較したところ、前者のほうが後者より多かった。原因は、自己主張が強制的に求められるディスカッションの場にあると考えられる。摩擦を緩和するため、主張する前に雑談の中で、自己の謙虚さを呈示することが日本人のラポールマネジメントの一つなのであろう。なお相手の自己をトピックにしたときにも緩和表現を使用する傾向があることも注目値する。

5.2 個人中心型タイ人のやりとり (Individual-oriented interactional pattern)

5.2.1 雑談には個人中心の性質が見られる。3つのグループのうち、一つのグループでは、個人中心のトピックがグループ全員に共通したトピックより多く使われており、残りの2つのグループでは、話し手の一人が雑談の40%以上を占め、個人中心の性質が強いように思われる。また、それぞれのグループにおいて、メンバーによる参与の割合も、日本のグループとは異なり、一定したパターンが見られなかった。

5.2.2 どのグループでも、強調表現が緩和表現より圧倒的に多かった。とくに、強調修飾語、終助詞、劇的な表現、物まね、語彙の繰り返し、心情的な感動詞などがよく用いられていた。3つのグループで合計した強調表現と緩和表現の割合は129：18である。

5.2.3 個人性がラポールの構築として利用される。雑談のトピックは個人のことが多かったが、自分のことか相手のことかという割合は一定のパターンがみられない。参加者たちの間で、自己が自由に交流していたのではないかというのが本研究の推測である。個人中心のトピックを観察したところ、主な内容は話し手・相手・他の聞き手の間で何らかの結びつきを築き、さらにそれを確認・再確認するという試みであった。例えば、個人間の共通した考えや好み、

個人間の過去に共通するでき事、個人へのからかいなどである。

第5章では、日本人・タイ人のそれぞれの雑談における異なった性質は、彼らのラポールが異なったイデオロギーに基づいたものであるからであるということを、第4章とともに証明した。日本人のラポールとは、その場に居合わせた参加者が、互いの心理的な領域に侵入せず、自己を調整し、安定したやりとりを作り上げることにある。その安定したやりとりは、徐々に規範となり、今度は参加者がその規範に基づいて、言語行動を行うことが日本的な「わきまえ」（井出，2006）なのであろう。一方、タイ人のラポールでは、その場に居合わせた人たちは、最大限自由に表現し、互いに自己を束縛せずにやりとりができる。要するに、集団のやりとりは、日本は場への「わきまえ」、タイは場への「ペンガンエン（気楽でゆったりしており、堅苦しくない様子）」がラポール構築の大切な要素であると思われるということが、この章の結論であった。

第6章は、前章まで述べてきた日本人とタイ人の特徴について、ラポールマネジメント理論の構成要因を参照しつつ、文化的な要素による説明を試みた。前章で見られた場へのわきまえ、他の参加者に押し付けることを回避する傾向、自己制御などの日本人の集団中心型やりとりは、公平の権利および交際の権利を守ることを重視することの表れであると考えられ、ラポールの理論的枠組みでは「社会的権利マネジメント」を優先しているといえる。一方、場にいる個々人の資質や立場に注意を払い、気楽な人間関係をつくり、互いの自己が自由に交流できるなどのタイ人の個人中心型やりとりは、ラポールマネジメント理論上、フェイス（接触のなかで、人が要求する肯定的な社会的価値を持つ自己イメージ）が重要視されているということが明らかである。

Hofstede (1991, 2001, 2003) は、50カ国の国民文化の違いを「五つの次元」で分類し、「個人主義⇔集団主義」の尺度では、集団主義の程度において日本が中程度で、タイは高いという結果を示した。もし日本よりタイのほうが集団主義志向であるならば、なぜ言語行動は日本人よりもタイ人の方が個人中心なのであろうか。

一つの仮説として、日本人とタイ人はそれぞれが持つ集団と自己への意識が違っているのではないかと考えることができよう。日本人の集団意識は、非常に場に重きが置かれている（中根，1967）。場や状況が変われば、集団の概念や所属性が変わっていくのである。一方、タイの集団は、親族、保護・非保護の関係、個人的資格（カースト）に意識が向いており、集団への所属は固く不変のものである（Onishi, 2006）。場を重視する日本人と、個人の資格を重視するタイ人は、人間関係を管理する仕方が、この研究で示したように異なるのであろう。

7. 今後の課題

本研究は、グループ・ディスカッションという共同作業の、言語的な側面の全体像を把握することが目的であったが、今後の課題としては、以下の点が挙げられる。

第一に、指示性発話、意見要求、助けの求め等、各項目のコミュニケーション機能を詳細に分析しなければならない。第二に、ビジネス、会議、知らない人同士など様々なジャンル、場面、状況での会話を分析し、その特徴を明らかにすることである。第三に、日タイの異文化間の交流企画や商談などに具体的に応用できるデザインを提示することである。

8. 研究の意義

以上、グループ・ディスカッションの場において、日本人とタイ人のラポールマネジメントの方略がどう違うかということをも明らかにした。この研究結果によって、日本人とタイ人が共同作業に取り込もうとした時に、異文化接触に際して、どのような問題が起き得るかが予測でき、さらにいかに予防・対処すれば良いかについてのヒントが得られる。文化、思考、行動、そしてラポールマネジメントの戦略はすべて関連しあい、影響しあい、互いに強化していくものである。文化によって、人間関係を円滑にする方策は多種多様である。他文化のことを多く知ることによって、異文化に接触する際に、心に余裕が生まれ、良い結果を導くことになるであろう。本研究の結果が、異文化間コミュニケーションに関わる人たちや言語コミュニケーションの教育に役に立つことを期待する。

参考文献

- Bales, Robert F. (1976) *Interaction process analysis: A method for the study of small groups*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chafe, Wallace (1994) *Discourse, consciousness, and time*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Egins, Suzanne and Slade, Diana (1997) *Analysing casual conversation*. London: Cassell.
- Hofstede, Geert (1991) *Culture and organizations: Software of the mind*. London: McGraw Hill.
- Hofstede, Geert (2001) *Cultural consequences: Comparing values, behaviours, institutions, and organizations across nations* (Second edition). Thousand Oaks: London: New Delhi: Sage Publications.
- Hofstede, Geert (2003) *Geert Hofstede™ cultural dimensions*. Retrieved September 23, 2010 from <http://www.geert-hofstede.com/>
- 井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』 東京：大修館.
- Iwasaki, Shoichi and Horie, Preeya Ingkaphirom (1998) The 'Northridge Earthquake'

- conversations: conversational patterns in Japanese and Thai and their cultural significance. *Discourse and Society*, 9 (4), 501-529.
- Lesch, Christee L. (1994) Observing theory in practice: sustaining consciousness in a Coven. In Lawrence R. Frey (Ed.), *Group communication in context: Studies of natural groups* (pp. 57-82). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Malone, Martin J. (1997) *Worlds of talk: The presentation of self in everyday conversation*. Cambridge: Polity Press.
- Martin, James R. and White, Peter R.R. (2005) *The language of evaluation: The appraisal framework*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- 中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係』 東京：講談社.
- Onishi, Jun (2006) *Working Japanese: Conflict, cultural difference, and the Japanese multinational in Southeast Asia*. Pasig City, Philippines: Center for Research and Communication Foundation.
- Pavlidou, Theodossia-Soula (2000) Telephone conversations in Greek and German: attending to the relationship aspect of communication. In Helen Spencer-Oatey (Ed.), *Culturally speaking: Managing rapport through talk across cultures* (pp. 121-142). New York: Continuum.
- Spencer-Oatey, Helen (2000) Rapport management: A framework for analysis. In Helen Spencer-Oatey (Ed.), *Culturally speaking: Managing rapport through talk across cultures* (pp.11-45). New York: Continuum.
- Tannen, Deborah (1984) *Conversational style: Analyzing talk among friends*. Oxford: Oxford University Press.
- Wuwongse, Warintorn and Washiradirok, Weerawan (2001) Comparison of Thai and Japanese viewpoints towards each other. *Warasarn Silapasart*, 1 (1), 194-215.

論文審査の結果の要旨

本研究の目的は、数名のグループによる課題解決型ディスカッションの中で、日本人とタイ人はそれぞれどのようなストラテジーを用いて互いの関係（ラポール）を維持・管理するのか、その方略にどのような違いがあるのか、という二点を明らかにすることにある。さらに、背景にある日本とタイ二つの文化には、それぞれどのような価値観の相違が存在するかということも併せて検討している。

本論文では理論的枠組みとなるラポールマネジメント理論および対話過程分析（Interaction

Process Analysis)」を批判的に検討した上で、既存の発話機能の項目を使わず、実際の発話を観察して提案された独自の機能分類を用いて、6グループの長時間にわたる議論の構造を分析し、多くの新しい知見を得ている。

具体的にはまず、日本人はグループ全体が対象となる話題を強く意識しつつ議論を進めるのに対し、タイ人には個々人の存在や資質を強く意識して話し合うことを好む傾向があることを示した。またリーダー役も、日本人は議論進行担当者と人間関係構築に関わる情緒的リーダーとで役割分担があり、かつ、各参加者が平等に発言を行うのに対し、タイ人グループではリーダーは一人で、会話構造に一定のパターンは見られなかった。すなわち、日本人のラポールとは、その場に居合わせた参加者が、互いの心理的な領域に侵入せず、自己を調整し、安定したやりとりを作り上げることにあり、その安定したやりとりは、参加者がその場の規範に基づいて言語行動を行う、日本的な「わきまえ」にある。一方、タイ人のラポールでは、その場に居合わせた人たちが、最大限自由に表現し、互いに自己を束縛せずにやりとりをする、場への「ペンガンエン（気楽で堅苦しくない様子）」が重視される。

従来、タイは日本よりも集団主義的傾向が強いとされてきたにもかかわらず、課題解決のための発話においても、ラポールに関わる情緒的側面においても、日本人グループが集団中心型のやりとりを好むのに対し、タイ人グループは個人中心型のやりとりを選ぶ傾向があるという点を明らかにした意義は大きい。また本研究成果によって、日本人とタイ人が共同作業に取り組もうとした時に、異文化接触に際してどのような問題が起き得るかが予測でき、さらにいかに予防・対処すれば良いかについてのヒントが得られるであろう。

なお、本論文の一部は国際語用論学会（International Pragmatics Association）の学会誌 *Pragmatics* に掲載され、国際的な評価を得ている。

手堅い分析であると同時に、理論とデータの双方に新知見が多く、その成果は論文提出者が自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示すものである。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。